

自校史における中国人留学生研究の可能性

山 本 一 生（東洋大学）

シンポジウム全体の様子やテーマなどについては他に譲り、本稿では筆者の報告内容を概説し、筆者が気になった報告を取り上げる。

まず、筆者の報告を概説する。報告タイトルは「東洋大学の中国人留学生」であった。1887年9月、井上円了により私立哲学館が創立された。1903年10月に私立哲学館大学と改称し、専門学校令により大学部・専門部が設置された。1906年6月に私立東洋大学と改称された。改称直前の同年5月、学則変更認可申請書として「私立哲学館大学学則変更認可申請書進達願」を提出した。そのため申請当時は「私立哲学館大学」だった。学則変更は、「別科トシテ日清高等学部ヲ置ク」ために行われた。設置目的は第一条に「日清高等学部ニ於テハ日清両国語ヲ以テ清国留学生ニ高等ナル學術ヲ教授ス」とある。課程として第二条に「高等師範科高等普通科高等法政科ノ三科」が置かれた。修業年限は第四条に「ニケ年」とした。報告では2年の修業年限となった背景に、速成教育への批判があったことを指摘した。その批判のきっかけは1906年2月と8月に清朝政府が出した留学生制限や速成学生の派遣中止命令であった⁽¹⁾。「東洋大学の場合、このような留学生最盛期に留学生教育が計画され、中国国内の学校整備の進展や帰国留学生の資格制限などにより、日本留学が減少に向かう時期に学科の整備をおこない予科をふくめて三年の課程の学科を開講したといえる」⁽²⁾。すなわち修業年限設定は、他校と比べて設置が遅かったため、速成教育の終焉の流れを踏まえて3カ年としたと考えられる。

1906年7月1日に私立東洋大学内に日清高等学部が設置された。前田慧雲学長は訓示の中で「本大学の主旨は、創立当時と少しも変わらず、矢張西洋の学問を以て東洋の道德、即ち東洋に於ける聖賢の遺旨を發揮せんとするに在ります、今回開設致しました日清高等学部には、高等法政理財科、高等師範科、高等警務科等と種々に科が分れ居りますが、教育の主眼は、前述の東洋の学を普及するに外はありませぬ」と述べた⁽³⁾。このように、日清高等学部は「東洋に於ける聖賢の遺旨を發揮」することを目指した。

日清高等学部は1906年7月2日にまず速成科が開講され、9月3日より2年制の2科が開講された⁽⁴⁾。2科は高等師範科（2年）＋予科（1年）、高等法政科（2年）＋予科（1年）で、それぞれが本科と予科を合わせて3年の修業年限であった。また速成科（6ヶ月）も併置された。

卒業について言えば、1907年2月28日にまず速成科の卒業証書授与式が行われ、合わせて283名が卒業した⁽⁵⁾。師範科と法政科の卒業式は1907年12月27日に実施され、卒業生は両学科合わせて101名で、最初で最後の卒業生を出すと日清高等学部は閉鎖された⁽⁶⁾。日清高等学部閉鎖後は、中国人留学生よりも旧韓国・朝鮮出身の留学生が増えた⁽⁷⁾。その理由を探ることは、今後の課題である。

1922年5月に「中華留学生同窓会」が設立された⁽⁸⁾。日清高等学部の創設から16年後に組織されたが、その間の中国人留学生団体については不明である。同窓会のメンバーは王思恭、銭鶴、滕固、師維翰、郭蔭棠、王希天で、同窓会の事業はおもに同窓会誌の発行と旅行団の組織であった。ただし、その後の活動については不明である。

質疑応答の中で、学籍簿資料の活用の可能性への言及があった。東洋大学では学籍簿資料が学内事務組織である教務部から、大学史編纂部署に移管され、デジタル化される予定である。デジタル化によって資料整理がなされれば、日清高等学部や本科などに在籍した留学生を調査し、データベース化することができよう。今回のシンポジウムでは、留学生を送り出す側の研究が主で、膨大な数の留学生がデータベース化された。さらに双方のデータベースを付き合わせることで、大学史の文脈での留学生史研究が進展すると思われる。

最後に、筆者が特に興味深かった研究を紹介する。それは、張小宇先生の報告「近代温州留日学生群体研究」である。温州の一族上げての留学生輩出事業に関する研究であった。それまで留学生個人や留学生数という把握の仕方しか知らなかった筆者にとって、留学生の背後にある一族の活動が具体的に示されたのが興味深かった。特に留学先の専門性を家長が判断した点、留学準備費用や学費などといった経費の問題に関心を覚えた。留学に至るまでのプロセスに一族がどう関わったのかという研究がどのように展開するか。改めて今後の研究の進展に注目したい。

注

- (1) 『東洋大学百年史通史編Ⅰ』1993年, p. 741。
- (2) 『東洋大学百年史通史編Ⅰ』1993年, p. 741。
- (3) 原典：『東洋哲学』第一三編第六号, 明治三十九年七月一日, 引用元『東洋大学百年史 資料編Ⅰ』pp. 277-278。 https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000604enryo01_100his1_129 閲覧日：2026年2月7日
- (4) 『東洋大学百年史通史編Ⅰ』1993年, p. 739。
- (5) 『東洋大学百年史通史編Ⅰ』1993年, p. 740。
- (6) 『東洋大学百年史通史編Ⅰ』1993年, p. 742。
- (7) 『東洋大学百年史通史編Ⅰ』1993年, p. 743。
- (8) 原典：『東洋哲学』第二九編第七号 (大正十一年七月一〇日), 引用元『東洋大学百年史 資料編Ⅰ』p. 453。 <https://www.i-repository.net/il/cont/01/G0000604enryo01/001/088/001088442.pdf> 閲覧日：2026年2月7日